

ちゆうしゅうつき
中秋月を望む

おう
王

せん
建

ちゆうてい ちくして 樹に 鴉栖む
中庭地白くして樹に鴉栖む

れいろ こえ なく 桂花を 湿す
冷露声無く桂花を湿す

こん や げつめいひと ことごと のぞ
今夜月明人尽く望む

しらず 秋思の 誰が 家に 在るを
知らず秋思の誰が家に在るを

【作者】王建(七七八年〜八三〇年?)中唐の詩人。河南省潁川(えいせん)の人で字は仲初(ちゆうしよ)、又は仲、七七五年進士、

秘書丞(ひしよのじょう)、侍御史(じぎよし)など歴任、太和(たいわ)年間河南省陝州(せんしゅう)の司馬(しば)として転出、
辺境の軍に従ったこともある。韓愈(かんゆ)の門下、樂府歌行(がふかこう)を得意とし、王建詩集十卷あり。

【語釈】*中秋:陰曆八月十五夜 中秋の名月のこと *中庭:庭の中のこと *零露:降ってくる露

*桂花:木犀(もくせい)の花 *秋思:秋に感じる寂しい物思

【通釈】今夜は中秋の名月。庭さきの地面は月の光に白く輝き、樹は静まって鴉もねぐらについている。やがて夜がしたいに更けて来て、
露は静かに声もなく、木犀の香しい花をしつとりと湿している。さて、今夜はこのように月が明るく照らしているのだから、

天下の誰もがこの明月を仰ぎ眺めていることであろうが、その中でも最も秋の物思いにふけっているのは、どこの家の人であろうか。
自分ほどこの秋の物思いにひたっている人はいないであろう。

【余談】珍名さんです、名字が「八月十五日」と書いて「なかあき」と読む名字の方がいらっしやいます。

八月十五日〓なかあき〓中秋のことで昔から八月十五日の月を「中秋の名月」(なかあきのめいげつ)と呼んできました。(?)
後の世に「ちゆうしゅう」と呼ぶ(読む)ようになったのでしうね。